
全裸である。最強である。

仏印帰還

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全裸である。最強である。

【Nコード】

N0550V

【作者名】

仏印帰還

【あらすじ】

100歳で大往生した老人の転生記です。ある意味、性格最強物。軍務経験はあるものの、ごく普通の日本の老人が、異世界で生活する苦悩を綴りました。

もし、貴方が現代社会に洗脳されているなら、9割のエロさと1割の苦悩を、そういったことと無縁であれば、9割の自然な素朴さと1割の苦悩を感じると思います。

1・往生

「又オウ。どういうことだ」

ワシ、シキベ ツヨシが生きている。老人ホームで胸が苦しいと思
いお助けコールボタンに手を伸ばしていた所だったはずだ。

「これは逝ったか・・・」

最後は、腹上死と決めていたが、まあいい。人生とはこんなものだ。
100歳も生きれば往生といえる。

「うん？シキベ ツヨシだと。ワシの名は違うような」

ワシは理由あって名を変えたが、元の名にも変えた名とも異なっ
ている気がする。

が、「シキベ ツヨシ」と言う名前だけしか思い出せない。

名前でわかったが、これは老人ホームで流行ったPCゲーム「V
I Z」のワシの創ったキャラ名ではないか。

V I Zはユウルテマ等といっしょに流行ったPCゲームのひとつで
ジジババ共と情報交換などしてハマったゲームだ。先日もあり込
んでいた。

ワドナの地下迷宮の奥から魔除の奪還。その目的のために様々なキ
ャラを作成して、パーティを組みモンスターを退けながら迷宮を探
索するゲームだ。 もっとも、目的から外れ、アイテムの制覇に熱

くなったゲームでもある。最下層で見つけた未確認のアイテムを確認するため、アイテムの鑑定ができる唯一の職業ビショップで作ったキャラが「シキベ ツヨシ」だ。最下層に連れていくため、最初は僧侶にして体力を増やしHPが100を超えた時点で、ビショップに転職させたキャラだ。もっとも更に忍者に転職したので鑑定能力は無い。

何度か、デーモン狩りなどもしたので、レベルは200を超えるが転職のせいでHPが低く、魔法が使える忍者とした特徴しかない倉庫在住歴の長いキャラだった。

その男の記憶が何故かある。ここは天国では無く「VIZ」の世界なのか？

周りは牛乳のようなこい霧に囲まれている。暫くすると少しずつ霧が晴れてきた。

「キヤーーー」

絹を引き裂く様な女の悲鳴が聞こえる。ワシの目の前で十代ほどに見える金髪のおさげの少女が悲鳴をあげて入る。

何ごとだ！

ワシの戦地での最終階級は軍曹。戦後もしばらくは仏印でベトミン共に将校待遇で教導したほどには荒事に自信がある。それに何故かはしらが不思議に体力があふれてくる。

「よお。嬢ちゃんどうした」

ワシが声をかけると、一瞬悲鳴が止み、少女が、目を見開いてワシを確認した。

そして、ワシを確認したあと更に盛大にワシを指さして声をあげた。

「キヤー!!!」

失礼な。外人は敬老精神ができておらん。うん？と自身の体を見ると裸だった。

全裸である。

「.....」

人生100年も生きるとちよつとやそつとでは動揺しない。無論、全裸でもだ。

しかし、驚くべきことがあった。若返っている。シワシワブヨブヨの体ではない。

20代後半か30くらいか。そのくらいの時の身体だ。

少女の悲鳴のせいで少しあせり、視野狭窄の状態であったが、だんだん周りが見えてきた。ここは街中だ。街並みは仏印のサイゴンを思わせる。

「懐かしい。何かも懐かしい」

ワシが仏印での思い出に思いを馳せていると、頭に衝撃があった。

「変質者がー！クタバレ！」

フランス語の罵倒が聴こえた。振り向くとヒゲ面の男が棒のようなものでワシを殴りつけてきた。

ワシは振り向きざまに棒をつかみ、そしてヒゲ面からあっさりと棒を奪い取った。

「信じられん。なんだ、この強さは！」

確かに、ワシは銃剣術が使えた。しかし、あくまで軍人として使えただけで特別強くもなく、あくまで並の腕だ。

ヒゲ面が化物と声を上げ逃げ出した。後ろからは少女の悲鳴が継続して聞こえる。

少女の方を向くと、腰を抜かしているのか、地面に腰を落とし地面を濡らしている。恐怖で失禁したのか。ぬれた部分が拡大していく。

「若い娘の小便の臭いか。久しぶりだな嗅いだのは……」

その時だ。

忘れていた青く、熱い、感覚が股間に走った。

「ぬっ、こっこれは……！」

勃起である。

20年は忘れていた。これぞ生きている証。男の象徴。その感覚を再認識した。若い雌に匂いに反応し復活したのだ。

「娘。感謝するぞ！やはり生はいい」

ワシは笑いながら、ゆっくりと娘を置いて、その場から離れた。歩くと股間の一物がブラブラする。

ワシと娘を中心に人垣ができていた。人垣からは何故か怒りの炎が見えた。

価値観が違う。

「これが、異世界と言うものか。この世界はワシに何をさせようというのか？」

異世界での老人の苦悩がここにあった。

1・往生（後書き）

先ずは、拙い文章を読んでいただいてもらったことに感謝を。

今後、見方によってはエロいかもしれません。取り敢えず、7話分（一部完）を読んでいただければ嬉しいです。

2・脱出

ワシは2話目にして窮地に追い込まれていた。ここが「VIZ」の世界かはわからない。人々の言語はフランス語。忘れかけていたフランス語が明確に意味を持って聞こえてくる。

「この変態」

「変質者！！」

「捕まえる！！」

棒や角材を持った十数人の男女が追ってくる。老人にこの仕打ち。この地はきつと精神が病んでるに違いない。

しかし、この体。俊敏である。土地感もない雑多な小路を逃げ回っているにも関わらず地元の民であろう連中に捕まらない。

「これが忍者か！」

フィリチン走法はなんだ。太ももに当たる愚息がピタンピタン音を立てる。なんとなく、忍びには向かない気がする。

「チツ、 回り込まれたか」

小路に入ったのは失敗だった。完全に挟み撃ちになってしまった。両側から、棒どころか剣を持った男たちを先頭に歩み寄ってくる。

「観念したか！この変質者め！」

剣を持った男が話しかけてきた。

ワシは余裕を持って、思い出したフランス語で対応する。

「少し誤解があったようだな。何。話せばわかる」

「ふざけるな!!」

流石に蛮族ガリア人を祖とする連中だ。カサエルの苦勞が偲ばれる。ワシは華麗に劍撃をさっとかわした。

「ガツン」

かわしたはずなのに頭に衝撃があった。後ろからだ。振り返ると、後ろから別な男が剣を振ったようだ。

しかし、痛くない。

そういえば「VIZ」の設定で忍者は何も装備を身につけない時が最強で、極めればチハタン（紙装甲の戦車）以上に強くなる設定があったような気がする。

すると、ワシはチハタン（ブリキの棺桶）より強いのか!!

「ああ。どうした。蚊が止まったのか？」

調子に乗ったワシは腕を組んで胸を張る。狭い小路だが、数人の男がワシに向かって、さかんに剣を立てるが痛くはない。

「フン。その程度か。今度はこちらから行くぞ！」

ワシが声に力を込めた。

「バツ化物だ!!」

そう、叫びながら囲んでいた連中が一目散に逃げ出していく。

悪者たちが逃げていく。気持ちがいい。これが正義の力というやつか。

鞍馬天狗にでもなったような感じだ。

小路を出ると大道りだ。先ほどは逃走中で気づかなかったが、石畳の道だ。一見、土のように見えるものは馬糞か？素足で歩くには少し抵抗がある。

「なるほど。ヒールが発達するわけだ」

さて、どうしたものか。「VIZ」の世界にこのような、おフランスの設定は無い。「VIZ」は洋物ゲームだか製作者の趣味で日本色の強いゲームだ。

ワシだけが忍者シキベ ツヨシで、場所はフランス語圏なのか？少なくとも見た限り時代は中世か。

中世のフランスといえば、疫病や魔女裁判。暗黒時代と言われ、人口が激減し紀元前より文明が低下した最悪の時期だ。

そう思うと、足元にも破傷風菌がうようよしていそうだ。とりあえず靴くらいは履きたい。しかし、靴は装備に入るのだろうか。

ふむ。少し、腹が減った気がする。食事をしながら情報収集して考えるところか。

情報収集は軍人の基本だ。

ワシは川が見えるテラスのテーブルに座り、食事とワインを頼んだ。ウエイトレスが来ないので、店の奥に向かって大声で注文する。

メニューなどという洒落たものはないので適当に頼んだ。会話を楽しみたいと思い中央に場所とつたが、周りに座っていた人達がテーブルを持って離れて行く。

避けられ、嫌われているのか。異邦人に冷たい土地だ。確かに全裸かも知れないが、何一つ悪いことはしていない。避けられる云われはない。不条理だ。これだから蛮族共は。

「オイ、アイツをたたき出せ！」

「いや、なんでも剣で突いても肌を通さない化物らしい！」
「警備隊に知らせろ！」

なんだか、不穏当な言葉が漏れ聞こえてくる。この店は客をもてなす心が無いのだろうか。全裸でも寒くはないが、心が寒い。

本当は、笑顔で会話に混ぜたいのだが、少し様子をみたい。今、混ぜるとなんとなく争いがおこりそうな予感がある。和を尊ぶ日本人としてそれは避けたいところだ。

暫くすると、料理が運ばれてきた。鶏肉の丸焼きと、白パンとワインだ。やはり中世か。ナイフやフォークが一般化したのは19世紀の後半だったか。

文明開花のころ欧州で流行中だったナイフやフォークが日本でも使われだしたとかの話は聞いたことがある。

周りを見ても手掴みで食べている。馬糞や人糞が飛び交う町で、ほとんど手も洗わない料理人が作ったと思うと萎えるが、まあいい。一度は死んだ身だ。

・・・

「うまいじゃないか！」

鴨肉と思われる肉はなかなかの味だ。脚をむしって豪快に食べる。期待していなかっただけにおいしく感じる。そういえば外地でも仏印のメシは旨かった。支那より日本人の味覚にあった様に思う。

ワシは久しぶりに食事を楽しんだ。己が歯で噛み締める。何十年ぶりだ？固いものを噛んだのは。

赤ワインは、相変わらず酢の如し。肉だから赤か。いや。この時代だと白ワインはマイナーなのかも知れない。一人の王様が白ワインを流行らせて定着したのだったか。仏印でそんな話を聞いた覚えがある。仏印では、ワインは薬味を入れて飲んでいたが、このワインもそのままではきつい酒だ。まあ、所詮、蛮人の酒だ。

食後の酒を楽しんでいると、一つの事実気がついた。

金がない。

流石に無銭飲食はない。無いが。食べてしまった。どうする？

異世界での老人の苦悩がここにあった。

3・奇跡

流石に無銭飲食はない。無いが。食べてしまった。どうする。

悪気はない。訳を言って働いて返すか？ メシが不味かったらこんな飯食えるかとか！と言ってテーブルをひっくり返す荒業が使えるのだが。（星一徹氏も推奨していた）この飯は水準以上の味だ。そんな人の道から外れた外道は行えない。常識人のワシにはできません！

悩んでいると、通行人らしい美しい女性が顔を隠しながら悲鳴をあげた。

「キヤアー」

うん。事件か。さっきもそんなことがあったような気もする。

ワシは立ち上がり、女性に最速で近づく、

「どうしました。マドマワゼル」

ワシの完璧な紳士の振る舞いに、女性は声も出ない。整った白い顔は蒼ざめている。体調が悪いに違いない。

「加減が悪いようですね。近くで休憩しましょう！」

ワシが抱えるようにすると、女性が気を失うのは同時だった。危なかった。少しでも遅れていたら、石畳に頭をぶつけていたかも知れない。

フランス語で宿はオテルだったかホテルだったか。ドミか？この街は店に名の表記は無い。蛮人国。識字率が低いのだろう。多くは木の看板で種別を示している。

多分、ベットを示すのであろう、看板の店に入る。かなり大きな建物だ。

「おやじ、部屋を借りるぞ！」

ワシが女性を抱えながら入り口のカウンターに声を掛けると、オヤジが震えながら鍵を差出してきた。

「湯を使いたい。用意してくれ」

了承したのか。おやじが頭を上下に何度も降る。頭にバネでも仕込んだような動きだ。

実はさつきから内心、困っていた。若い女性を抱えたせいだ。股間が硬くなってしまっていたのだ。

ただのフリチンはもう慣れた。

慣れてしまえば、どうということはない。

しかし、硬くした股間を振り回すのはなんだ。少し恥ずかしい。年齢

100歳でも恥ずかしいことはある。女性の体で隠したが、女性の体により接触し密着した体温を感じることで、より硬度がました。

カギは101 二階か。カウンター奥に階段がある。階段を上がってすぐの部屋だった。

扉を開け女性をベッドに寝かせたがやはり顔色が良くない。服がきついのもかもしれない。コルセットだったか。この時代の女性は無理に体を締め付けるので体調を崩したり、気絶することが多かったと聞いた。

「おお、これは、早急に楽にさせねばなるまいぞ。一刻を争う！」

ワシは大義名分を得て、服を脱がしにかかった。脱がせるのは得意だ。

「おお！」

思わず声がでた。想像以上の大きさの乳だ。コルセットのような複雑な服ではないようだ。単に紐で軽く締めているだけ。簡単に脱がせそうだ。

コンコンと言う音と共に、ドアが開いた。

「湯をお持ちしました」

そう言いながら若い下女が二人で湯船を運んできた。陶製だろうか？陶器を思わせる質感のバスに木製のタイヤが付いている。

ワシは少し驚く。このような文明の道具があったとは。今まで観て

きた文明レベルから逸脱している。

「どうしたのだ。この湯船は？」

「こ、古代文明の品だそうです」

ワシが問うと、12、3歳に見える下女が咬みながら答えた。顔は赤らんでる。相変わらず股間の一物が天を向いた状態だ。宿仕事ならよくあることだろうに。経験が足らんな。

あとで、ワシが学習させてやろうか等と思っていると、さっさと部屋を出て行ってしまった。

古代文明とはなんだ？ローマ文明か。疑問は多い。浴槽には細かい割れ目が無数にあるが、明らかに陶製で大人一人が十分に入れる大きなものだ。

ああ、そんな場合ではない。女性を介抱せねば。手早く女性の服を脱がし。裸体を鑑賞する。乳だけではない。肢体も想像以上だ。

顔をよく確認すると思ったより若い。白人系はふけて見える。最初見たときは20歳くらいと思ったが、十代半ばくらいか。仏印時代の愛人を思わせる美しい容姿だ。

湯の温度を確認し全裸に剥いた女性を抱えて入る。

ワシは女性の体を湯船にゆっくり横たえる。

もしかして心臓が悪いのかもしれない。ならば心臓マッサージは必須だ。

ワシは女性の足の方に跨るようになってしゃがみ大きな乳を揉み出した。

しばらく、乳を揉んでいると、股間の愚息が偶然、女性の太もも間を往復するような動きをした。

「フム」

気持ちよかったので、繰り返した。何度か行くと愚息が女性の股間を突くような動きになった。

やはり気持ちいい。

「おおっと！」

その時！！足を滑らせてしまった。けっして意図したわけではないが何故か女性の胎内に愚息が入ってしまった。世の中には不思議なことがままある。

ワシは、女性は大丈夫かと心配し顔を覗き込むと目があった。

ワシはにっこり微笑んだ。

「キヤーー」

悲鳴が室内にこだまする。

「大丈夫です。ご安心下さい」

ワシは抱いたまま、女性に話しかける。

「イヤァ」

しかし、話を聞いてもらえない。仕方ない。女性を落ち着かせるにはこれしかあるまい。

とりあえず犯した。

.....

アンヌがワシの上で腰を振っている。一週間前まで処女だった娘とは思えない動きだ。相性が良いのか、今日も既に5戦目だ。

誤解は直ぐには解けなかったが魔法を使うと状況が変わった。破瓜の痛みを訴えるアンヌに対し、試しに使った回復魔法が劇的に効いたのだ。

湯船を取りに来た下女のあかぎれた手も回復魔法で、一瞬で治った。魔法という奇跡を見たからか下女達も態度を一変させた。

この世界にも魔法や奇跡はある。いや、信じられているとすべきか。噂を聞いた怪我人や病人が集まり出すのに時間はかからなかった。

失った腕が一瞬で復活し、見えない目が見えるようになる。病気は治らないことも多かったが、少なくとも病が全快した。

全裸の変態の評価は、この界限では全裸な奇跡の具現者が変わった

ようだ。 一部のものから、既に神のごとく慕われている。

異世界での老人の苦悩がここにあった

4・聖者

全裸の変態の評価は、この界限では全裸な奇跡の具現者になつたようだ。一部のものから、既に神のごとく慕われている

アンヌとのも不幸な事故であつたし、アンヌの出した条件。ワシが責任をとることを了解したからだろう。態度は軟化した。

男だろうと女だろうと結婚相手は選べない。21世紀でも半分以上の男女がそうなのだから中世のような世界で相手を選べたらSFのカテゴリーだ。

アンヌは貴族の三女だつた。もつとも領地もない法衣貴族で、婿養子の父親が商家出身のため、多少持ち直した程度の貧乏貴族だ。

アンヌは自分の器量がいいだけに、上級貴族の妾にでもなつて自由がなくなるよりはワシに賭けたようだ。あくまで、ワシの女として責任を取るのであつて結婚ではないのだが、フランス語は難しい。アンヌの機嫌もいいので詳しい説明はさけた。面倒だし・・・

少なくとも既にワシの女としてふるまい、治療費の折衝から、怪我人の選定、宿の従業員を僕のように扱っているし、金が無い相手に対しては、鬼のように冷たい態度をとるのも目撃し、少し引いている。

この部屋での爛れた生活も悪くないのだが、そろそろ、外に出たい。そう思つてアンヌや下女に服を買ってきてくれないかと頼むのだが、ノンノと首を横に振つて買ってきてくれない。どうも、彼女達にとってワシは全裸でなければいけないようだ。四六時中、アンヌ

がくつついているので軟禁に近い状態だ。

そろそろ、他の女も抱きたい。

・・・いや、なんとなくワシには使命があるような気がする。服が無ければ動けまいと思うのが女の浅知恵よ。

アンヌが化粧室に消えた隙をついて、ワシは正面の窓から外に飛び出した。二階の窓などワシの運動能力なら、どうということはない。着地を決めると、足が柔らかい物を踏みつぶした。本当に汚い町だ。感触で何を踏んだか理解したワシは一度宿に戻る。足ふきマットで丹念に足を拭いていると、フロントのオーナーがさかんに話しかけてくる。が、無視した。

「ちと、出かけてくる。夜には戻る」

ワシはそう言って、宿を後にした。

そういえば、この街の名はパリス。なんとか伯爵の領地だとか。いろいろ、何となくフランスっぽい。ワシの似非フランス語が通じるくらいだし。

ワシが犬や馬の糞を避けるようにジグザグに歩いていると、注目を集め始めた。

「全裸だ！」

「変態だ！」

「いえ、あれは聖者よ」

数人が群がるようにやってきた。悪意はなさそうだが。見ると、体の具合でも悪いのか、色々悪そうな腰をかがめたばあさんもいる。

「裸の聖者様、どうかご慈悲を！」

ばあさんが泣きながら訴えてきた。一見、ばあさんに見えるが多分40代だ。恐るべし白色人種。

もともと、女性は十代前半で子供を生む社会なので、20代であればーちゃんも居るし、40代ともなれば普通、曾孫もいる。凄いぞ中世。

治すのはいいのだが、病はワシの呪文では治せない。外傷等の怪我は治せる。毒の治療。麻痺も治せる。しかし、疾患、病気は完全には治せない。一時的に状態を良くするだけだ。まあ、この、ばあさんのリュウマチには聞くだらう。

「マデイ」

ワシが全快呪文を唱えると、曲った腰の痛みが取れたのか、ばあさんが直立した。

「あああ、痛みが、取れちまったよ！聖者様、ありがとうございます」

わかったから、縋り付くな。

辻治療はいかな。どんどん人が増えてくる。

ワシの治療魔法は、MPとかではなくて、一日に使える回数が決められている。内容にもよるが一日に十数回。完治の魔法は6回が限度だ。

ばあさん、娘はいないか？お礼は娘を宿に遣わせてくれ！

「聖者様、お慕いしてます！」

小柄な娘が、抱きついてきた。おお、この娘は以前治療した娘だ。適切な呪文を見極めるため、一部の女性に限り、詳細な診察を行っている。

胸は小ぶりだが形がよく。とても美味しそうだった。治療自体は解毒の呪文と初歩の治療呪文で回復した。

商家の娘だったか。毒を飲まされる環境にいるのかと思いい心配していた少女だ。

「ふも、その後は順調かな。私も気になっていた」

「そんな、聖者様に気にかけていただけなんて・・・」

頬を赤く染めるしぐさが堪らん。おおっといかん。この程度でも反応するほどに体が若い。

ワシは股間を彼女の視界から隠すために彼女を抱きあげた。

「どれ、一応診ておくか！」

近くに宿があつたのは確認済だ。定宿からは少し離れている。

親父、部屋を借りるぞ。

ワシは速攻で部屋を借りた。もしかしたら、また、毒を飲ませられているかも知れん。治療を急がねばなるまい！

ベットに娘を横たわらせると、娘がキスしてきた。長いキスを終えると娘の目がうるうるしている。恋した娘っ子の目だ。これは期待に答えねば。

「私、初めてなんです」

「大丈夫、優しくする」

ワシはキスを再開した。

.....

「あんだ！、調べはついてるんだからね」

ワシがマリーの尻を、後ろから突いているとアンヌが鬼のような顔で入ってきた。何故、アンヌがここに？ 疑問もあるが、今、それどころではない。

そして、耳を引っ張り始めた。痛い！剣で切られても痛くないのに
どういうことだ。

「聖者様を独り占めしないでください！」

マリーがアンヌに食ってかかる。いかん。完全に修羅場だ。壮絶な

口喧嘩が始まった。取っ組み合いになったら催眠呪文で眠らせよう。

.....

「えー、それじゃ、ポアンド叔父さんの娘なの。もしかしてマリーちゃん？」

「はい。娘のマリーです。それで、伯爵様のところに奉公に出るって話になって.....」

「あ、それ、絶対に犯られちゃう。私にも妾の話が来てたもの！頭にきて家飛び出しちゃった」

.....なんだか終息してた。商家の娘マリーはアンヌの従妹のようだ。

マリーが着替え終わると、両側から腕を取られた。胸を押し付ける言っな感じで両手に花なんだが、連行されるような気持ちだ。さっきまでマリーの胎内でいきりたっていた物も小さいままだ。

定宿に戻ると、正座させられた。日本の風習の話などしなければ良かった。

「なにか、言うことはありませんか」

アンヌが裸になって仁王立ちだ。下から見ると組んだ腕の上の下乳しか見えない。

うっ、あやまつちゃおうかな.....と思っていたが。アンヌの下からアングルの肢体を見た愚息が元気になってきた。

これならいける。

ワシはアンヌの腰に抱きつき、持ち上げた。抱いて有耶無耶にする
しかない。

謝ったら負けだ！

今日の夜も長そうだ。

異世界での老人の苦悩がここにあった

5・親子

結局、昨夜は3Pに突入してしまった。アンヌも同性に見られるのが興奮するのか燃えたし、マリーもつられて声を出した。喘ぎ声を出すアンヌはワシの仕込みだ。AVも無い時代、商売女でもない限り、声を漏らさない。あれは商売女が生み出した男を早く逝かせる技だ。

一応、アンヌには尺八から前立腺マッサージ。日本の風俗女性や人妻なら嗜む技術は教え込んだ。マリーの調教は既に始まっている。

今日も、治療の客を取っていた。この宿の二階は既に3部屋借りている。101がベットルームで102診察室。103がワシの治療を待つ待合室だ。

宿のオーナーから一番下の従業員まで、一度は見てやっているのだから信者のような状態だ。アンヌが多少は宿代に色も付けているので上客でもある。中世は、宿で商売する人間も珍しくはない。

アンヌが受付し、マリーが看護婦役だ。最初、宿の若い下女にも多少手伝わせていたが、ワシの視線が下女の腰や胸を見ているのに気づいたアンヌが遠ざけた。

一応、白い巨塔シリーズやブラックジャックは愛読していたのでお医者さんごっこは得意だ。診察のマネごとに問題は無い。爺さん婆さんが客に多いのが一番の悩みだが。

好みの美形で栗色の髪の娘が来たので、全部脱がして治療をと思っ

っていると診察室に乱入する男達がいた。

「パパ」

「アンヌ、こんな処にいたのか！」

「この変態、マリーから離れる！」

アンヌとマリーの父親のようだ。

ワシは大きく手を広げ、父親たちを止める。

「ワシを倒せるなら、娘たちを帰そう。」

「言つたな。この変態が！」

腰に差していた細剣を抜いて突いてきた。ワシの胸に当たると突いた細剣が大きくしなる。段平で斬られても平気なワシだ。細剣など効かぬわ。

ワシは興奮して、赤い顔になっている二人に、眠りの呪文を掛ける

「カティノ」（催眠）

二人は細剣を放り出してしゃがんだ。ほう。眠りの呪文を掛けるとこうなるのか。

とりあえず、ロープを用意してもらって二人を縛りつけた。

さて、治療に戻らねば。

眠らせて全裸にして、お椀のような胸をもんだり、耳を胸にあて感触

を確かめながら心音を聞いたり、小さな桃色の乳首をつまんだり、股間の茂みを確認したり、性器を広げて色を確かめたり、濡れ具合はどうかと確認する。

聖なる診療のあと、全治の魔法をかけた。本当は、精神注入棒を差し込んで治療をしたいが監視の目もある。

流石にこれは、治療ではないと既に処女ではないアンヌやマリーにはばれてしまう。

アンヌの方を見ると、父親達を説得中のようだ。アンヌが金貨の袋を見せている。商家出身と金策に困っている貧乏貴族の二人には、金が一番効果的なようだ。どのくらいの額なのかは知らん。

治療の魔法で感謝されたり、女の子を気持ちよくさせることに興味はあるが、金銭的な欲求は不思議にない。聖者と煽てられているせいか。ワシが死んで家族を失っているせいか。

アンヌがお金を差し出しているが、父親達は結局、受け取らないようだ。

「結局、貴族との私やマリーの話は、つなぎみたいね。いざ、という時の」

「影響力のある人間なら、誰でもいいってこと？」

マリーが聞いてきた。

「そうみたい。ポアンド叔父さんもそんな感じ。でツヨシも聖者と

して有名になりつつあるし、奇跡ってやっぱすごいから・・・」

ワシも聞いているのだが、聞き取れないと思っっているのか、内緒話をしている。

貴族の娘でも割と下級のアンヌや貴族ではないが上流階級に位置するマリーの家くらいだと、美しい娘は、上位の貴族の側室や妾。器量が悪い場合、より下位の貴族や上流階級の家には正妻として送り込まれる。ピラミッド構造の支配階級の社会では、同格の者同士の間では少ない。意外に貴族社会では、外はともかく家の中では妻の方が家の格が高いのが普通だ。

日本の江戸時代の武家のように女尊男卑が極端な例もある。

アンヌとマリーに与えられた役割は、癒しの奇跡を行う聖者を意のままに操ること。そんなところだ。ふん。甘いわ。ワシの半分も生きていない小僧どもや娘っ子の思惑通りに行くと思うなよ！！

等と思っっていると、アンヌが足の間に入ってきて啜えた。小娘の思惑通りに逝っってしまうかもしれん。

ワシに自由はない。朝起きると、拘束具のように両側にアンヌとマリーがしがみついている。二人とも可愛く愛おしい。それは間違いないのだが、ワシも健全な男。偶には、違う女も抱きたい。最近では、若い娘さんの患者さんもめつきり減っってしまっい。ワシ自慢の丁寧な診療を披露する機会もない。

診察の途中で、がまん汁が出てきそっんな患者はいないのか！！

異世界での老人の苦悩がここにあった

6・教会

「エグウ、エグ、許して」

アンヌが、ワシの腹に頭突きをかますような感じですがりついて、泣いている。ワシは考えを変えるつもりはない。

いっこうに若い娘の治療ができないワシは、アンヌの受付の様子を確認するようにしたのだが、これが酷いものだった。

商家の血を引いてるだけあって、金勘定も交渉もいいのだが、貧乏人に対する扱いがひどい。金のない貧乏な病人には殴る蹴るはするし、いつの間にか雇ったのか？用心棒に外に放り出させる等ということを見せていた。

中世に平等なんて言葉も概念もない。だが、公正という言葉はある。権力者や金がある者が弱者をいたぶったり、金を糞りとったりすることは公に正しいこと。そういう価値観だ。

アンヌ的には金を得る立場になって、正しい行いしたにすぎないのだろうが。日本人のワシには面白いことではない。

それに、金のことを聞くと宝石を買ったり、人雇ったりと使い方も荒い。日本人の感覚で金の管理をまかせたが、女が管理する習慣など日本か東南アジアの一部しかなく、そういった土台もなく経験もないアンヌは小遣い感覚で使っていたようだ。

別に金に執着はしないが、一応、働いた金が散財されるのも面白くない。

そこで、金の管理はワシがし、さっき取り上げた金を銀行に預けた。金がなくとも若い娘の治療は、優先するときつく叱ったところだ。

流石に、全裸で銀行はかなり騒然となったが金を預ける分には問題ない。高い手数料は取るくせに金利ひとつ、つかない悪徳銀行だ。

アンヌが泣きやまないの、少し仕置きする。まだ、尻は試してなかったな。

アンヌの服を剥ぎとろうとしていると、突然、扉が開いた。

「貴様が、偽りの奇跡を行い、金を騙し取っているのは！」

「せ、聖堂騎士！」

アンヌが声をあげる。

乱入してきた男たちは、中世の騎士の格好をしたコスプレ集団だった。

「おい、この裸の男を捕えろ」

ワシは、抵抗しなかった。数人の男に縄で縛られ連行された。

「ツヨシ……」

「大丈夫だ……」

ワシは唯一自由になる口で答えた。

この地の宗教はキリル教という。現実のキリスト教のようなもので、快楽的な殺人、人身売買、あらゆる凶悪犯罪の元締めのような存在だ。そして、この聖堂騎士がキリル教の実行部隊だ。

実は、前々から、噂は聞いていた。奇跡はキリル教の専売で商売敵をいずれ叩きにくるだろうと。

「隊長、これで臨時収入確保ですね。新しい女を仕入れましょうや
！」

「ああ、情報だと荒稼ぎしているとの話だ。司教猥下もお慶びだろ
う」

ワシを殺すつもりなのか。気楽に話している。キリル教の高位の者は、実に公正さを発揮すると聞いている。権力を使って、商売敵から金を薙り取る正しい行ないだ。

縄を抜けるのは難しくない。しかし、ワシは大人しくついて行く。VIZの魔法をいくつか試したかったのだが、魔物も居らず、なかなか使う機会もなかったが、このような完全無欠な悪者が、本当に実在するとは嬉しくなった。

大きな建物だ。築地本願寺の半分くらいの大きさはある。大聖堂等と聴こえた。

ケツを蹴飛ばされ、前に進む。

・・・個人的にアヌスに靴先をねじ込むのはやめて欲しい。

大聖堂の中に入ると洋風の結婚式場のような感じだ。

「猊下、件の裸の聖者を自称する変態を捕らえました」

隊長格の男が言うと、いかにもの司教の服を着た男が立ち上がる。

「貴様が変態か！」

顔を見てわかった。悪人だ。市井を騒がすだとか、神の御名においてだとか口上を垂れてる。聖堂の中には100人以上の聖堂騎士がいるがかまわん。

「マカニト」（雑魚一掃）

ワシは呪文を唱えた。力ある言葉を放つ。聖堂内で金属が続けざまに落ちるような音が響く。

聖堂内にいたワシ以外の人間が全て消えた。司教もワシを連れてきた騎士の隊長も服や鎧を残し消えた。

「ほお。ここまで強力だとはな」

回りを見ると、鎧や剣もあるが、金貨や銀貨も転がっている。身につけていたものだろうか。司教の服を袋がわりにして回収しておく。

聖堂から奥に入るドアがあった。ワシは中に入った。

いくつか小部屋を抜けると、男の精と濃い女の匂いのする部屋があった。半分は寝ているのか。裸のワシが入っても特に反応をしめさないが、二十数人程、若い女がいる。

ほとんどが、拐われたのか、買われてきたのか？特に拘束はされていない。

ワシが近づいても反応はない。

見ると、怪我をしている娘もいる。殴られたのか顔にあざや、前歯が盛大に欠けている娘もいた。

「ふん！マデイ（全快）」

近くにいた怪我の酷い娘から順に治療を施していった。

.....

「ありがとうございます、ごぞいます。御恩は一生忘れません！」

ワシは娘たちに聖堂で手に入れた銀貨を適当に配って部屋に後にした。娘たちの感謝の気持ちを受けたいのは当然だが、聖堂騎士の精子まみれの娘達を抱く気にはなれなかった。一応、定宿を教えておいたので、後に期待したい。

他の部屋も確認したが、キリル教関係者は逃げたのか見つからない。金目のものもあるのだろうか。荷物になるので、貰うのは諦めた。

宿に戻ると、アンヌもマリーも全ての私物と部屋にあった金を持って逃げていた。宿のオーナーに訪ねても、行方はわからなかった。多分実家に戻っているだろう。二人のお尻はまだ、試していなかった。少し残念だが、まあいい。

「え？え？」

通りがかった年若い下女を抱き抱えると部屋に戻った。

「アレー、聖者様、ダメです！！」

面倒なので、口に一物を差し込んだ。

異世界での老人の苦悩がここにあった。

7・旅立

自由である。

人には何と制約の多いことか。

人の世界であるこの異世界でも、制約が多かったが・・・しかし、自由なのだ。

衣服という制約からの開放！ 女というワシの意思砕く存在からの開放。

アン又達が逃げたおかげで、自由になった。

「アン又様に見つかったら、殺されてしまいます！」

ワシの横で、裸で泣いている下女が何か言っている。

この娘。近くの山村から口減らし兼出稼ぎで奉公に来ている、なかなか可愛い娘さんだ。

さつきワシが女にした。自由人だから仕方がない。

自由だが、女にした責任を僅かに感じてしまった。男とはそんなものか。

「何、大丈夫だ。ワシがなんとかする！」

「聖者様が無事と知れたら、アン又様やマリー様が戻ってきますよ。」

絶対。わ、私、ひどいことされちゃう。な、何度も見たもの・・・」
そう、アンヌもマリーもこの世界の公正さには厳格な性格だった。
下層の人間を同じ人間だとは微塵も思っていない。流石に革命が起き
るお国柄だ。

うーん。どうしたものか。幸い教会から持ってきた金貨と悪徳銀行
にあずけた金で、生活には支障ない。

ふと考えた。

「さっきの故郷の話で、熱い湯が出ると言っていたな」

「はい、古代文明時代は、人が入っていたらしいです。修行か何か
に使われていたそうです」

・・・温泉が悪くない。暫く山村に隠れるのもいいかもしれん。

ここにいると教会絡みで迷惑をかける可能性も否定できない。

「よし、その山村に行こう。ワシについてこい！」

ワシはパリスを出ることに決めた。アンヌ達を見捨てる訳ではない。
少なくとも宝石も持っているし生活に困ることもあるまい。少しだ
け自由時間を貰うだけだ。

ワシは宿の主人に事情を話、娘の奉公の権利を買った。

「お気をつけて、またのお越しをお待ちしております」

宿の主人に見送られながら出ると、娘が縋り付いてきた。

「お願いです。聖者様、どうしても救ってもらいたい人が……」

涙目で縋られた。上目使いも旨い。一晩で成長したものだ。

これで反応しない男はいない。路上で一物が変形し始めた。

「わかった。わかったから」

ワシは股間を少女に押しつけ、世間から隠す。ここは人通りの多い路上だ。

少し恥ずかしい……かな？

救ってもらいたいというのは、彼女、シエリーの妹エヴァだった。

なんでも年子だそうだ。一緒にパリスに奉公に来たのだが、雇われ先で直ぐに失明してしまい。今は教会の施設に身を寄せているらしい。

教会と聞いて、焦ったが大聖堂ではなく貧民街を抜けたところにあるキリル教の小さな教会だった。

川の畔にある。みすぼらしい、言うては難だが……石と木々のパッチワークのような代物だ。上の方にある、傾いた木のクロスが教会を示すものか。

「神父さん、いますかー？ エヴァー。おねいちゃんだよー」

シエリーが中に声をかけて暫くすると、黒い襦袢をまとった神父らしい中年男が現れた。襦袢ではあるが洗ってあるのか。正しく清貧。明治生まれとしては琴線に触れる部分があった。

「これは、シエリーさんですか。 エヴァ。おねえさんがみえたよ」

また、少し時間を置いて、鼻から上を襦袢布で被った少女が現れた。エヴァと思われる少女とシエリーが抱き合っている。

「え！ 噂の聖者様ですか？」

ここの教会にいる者達は、皆、目が見えない。どおりで、裸のワシを問題視しない。シエリーがワシをここに連れてきたワケを説明している。

治せない病気があることなども話している。シエリーは治療の手伝いなどを行っていた。ワシが色目を使い出してからアンヌに遠ざけられたが、助手としては有能だ。

エヴァを取り敢えず裸にする。若い女性の場合は必ず裸にしている。疑念はない。体には少なくない傷跡がある。この世界では障害を持つ弱者は、罪深き存在だ。暴行を受けることも多いのだろう。頭に付いている襦袢は血が癒着して取れないでそのままだったようだ。奉公先で鈍器で頭を叩かれ、出血して治療を受けることもなく、暫くして目も見えなくなつた。

奉公先を放り出され、今に至る。 目が完全に見えないわけではな

い。明るい、暗いの違いは判る。軍ではよく見る連中と同じだ。多分、網膜剥離だ。

これなら、治せる。

ワシはエヴァに完治魔法をかけた。

「マデイ」

ワシの力ある言葉で、エヴァの体にあつた傷跡が全て消えた。

そして、血で癒着して取れなかった、頭を覆っている襤褸を筆り取る。

「あああ」

エヴァが嗚咽を漏らす。

「見えるのエヴァ？治つたのエヴァ　ねえ！」

エヴァがシェリーに抱き付きながら、ただ、泣いている。シェリーに似た可愛い少女の泣き笑いの笑顔だ。ワシもいい仕事をした気になっている。

「見えるよ。シェリー！　神父様、見えます。はっきりと」

・・・

教会にいた全員を治療したが、エヴァの他にも目が見えるようにな

ったのは、一人だけだ。他は病気だったようだ。目の治療自体はできなかった。それでも、多くのものが体に怪我があり治療で癒されたため非常に感謝された。

キリル教は嫌いだが、ここはなんとも心洗われる存在だ。神父の影響か。結局は人なのだ。多少の寄付くらいはしていこう。元々キリル教会の金だという意見もあるし。偶には、奉仕もいいだろう。

ちなみに明治生まれはボランティアと言う言葉を愛国者という意味で捉えるので使わないように！

そんな事を思っていると、

「キヤー、イヤー！ 変態！ イヤー」

少女の悲鳴だ！ 何事だ！

と見ると、エヴァがワシを指さしている。先ほど、エヴァはシェリーと泣きあった後、子供のように寝てしまった。そのため、起きた今、初めて目のあいた状態で、ワシに気がついたようだ。

「ふむ、神父殿、もう少しエヴァには治療が必要なようだ。隣の部屋を借りますぞ！」

ワシはそういって、エヴァを小脇に横抱きにして、隣の部屋に消えた。

「イヤー！ やめて、そっ、そんな！ 絶対イヤー！」

恩知らずには、賤が必要だ。 賤には精神注入棒がかかせまい。 ワシはおもむろに治療を施し始めた。

・・・

穴という穴を、犯すとエヴァはだいぶ素直な娘になった。途中で、シエリーも入ってきたが、こちらは慣れた顔だ。アンヌやマリーのプレイをいつも覗いていたらしく、普通に参加してきた。

・・・

さて、

賤は大人の義務とは云え、無節操に関係を増やすのはいただけない。また、関係者が増えてしまった。

「ほう。目が見えるようになったら、奉公先が文句を言ってくるかもしれないと。」

「はい、そうなんです」

「お願い、聖者様。助けて！」

考えなしで縋ってくる。それは、いいのだが、あまり問題を大きくしたくない。金で解決が一番だが、エヴァが感情的になっていて、ワシが出すと言っても納得しない。

「ここは、逃げよう。山村に逃避行だ！」

「ええ！逃避行！」

エヴァが一人自分の胸を抱いて悶えた。壺だったらしい。ぬれぬれであった。

「それでは、お気をつけて。無事をお祈りしておきます」

神父殿と別れの挨拶をし。山村へ。温泉へ。馬で旅することになった。

神父には何かあった時の為に多めの寄進をしておいた。人が良過ぎる部分もあるが、信用のおける人柄だ。悪い使い方しないだろう。

ワシは大陸時代、馬はよく使ったので問題ない。久しぶりではあるが。そのワシの馬術よりシェリーのほうが馬術は上手いかも知れん。山娘は侮れん。

エヴァはワシの前に横座りで座っている。あごの下にエヴァの頭があたってこそばゆい。

温泉か、ソーププレイは試さねば！ おおそつだ。ローションはどうしたのか！

等と、らちもない事を思っていると、大きくなってしまった。

座っているエヴァを持ち上げて、ズボンを下着ことペロンと脱がす。

「だめえ 馬上はやめてえ」

「うぬ、まだ抵抗するか、ここをこつしてやる」

「お願いです、あぁー」

さて、山間の村では、どんな苦難が待ち受けているのか！

異世界での老人の苦悩がここにあった

7・旅立（後書き）

一応、一部終了です。要望があれば続きを書きたいと思います。

ここまでお付き合い、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0550v/>

全裸である。最強である。

2011年7月26日13時08分発行